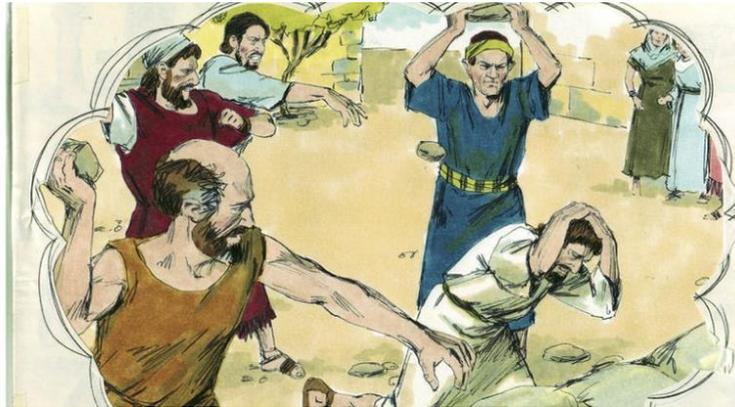


2023年8月13日 説教「教会ごとに」

使徒の働き 14章 19～28節

パウロとバルナバはルステラにおいて、足のなえた人の癒しに関わりました。人々は驚嘆し、彼らを崇めようとなりました。パウロは「私たちも同じ人間です」と言い、生ける神を崇めることを教えました。



1. パウロへの迫害 (19～20節)

①パウロを石打ちにし (19) 「ところが、アンテオケとイコニウムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。」

ピシデヤのアンテオケとイコニウムのユダヤ人指導者たちは、パウロとバルナバの迫害を計画していました。彼らはルステラまでやって来て、群衆を巻き込み、パウロへの石打ちを実行したのです。ユダヤ人指導者達は、キリスト教を否定していましたから、容赦ありません。彼らはパウロが倒れ、死んだと思われた時に、町の外に引きずり出しました。

②立ち上がり (20a) 「しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町に入ってしまった。」

町の外において、パウロやバルナバの弟子達は、これ以上の石打ちがなされることのないように、倒れたパウロを取り囲んでいました。ところが、パウロはおもむろに立ち上がったのです。主の特別な御手が働いたのでしょう。どういふのも、ユダヤ人達が石打ちをするのに、力を抜くはずがなく、少なくとも瀕死の状態であったと考えられます。パウロはダマスコ途上に続いて、神の特別な御業に浴したのです。敢えて町に入ってしまったのは、挑発ではなく、主を御力を証するためでした。

③デルベに向かい (20b) 「その翌日、彼はバルナバとともにデルベに向かった。」

パウロは石打ちを受けた翌日には、バルナバとともに、デルベに向かいました。そこはルステラから南東に 50 キロほどの所でした。この距離は石打ちにあった人には、歩くのがつらかったと思われます。

2. 諸教会への励まし (21～23節)

①引き返し (21) 「彼らその町で福音を宣べ、多くの人を弟子としてから、ルステラとイコニウムとアンテオケとに引き返して、」

デルベは古くからある高原の町でした。二人はその地においても積極的な伝道をしました。イエス・キリストの福音を宣べ伝えたのです。そこでも多くの信者が生まれました。その後は、伝道してきた地である、ルステラ、イコニウム、アンテオケに引き返しました。

②フォローアップ (22) 「弟子たちの心を強め、この信仰にしっかりとどまるように勧め、『私たちが神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない』と言った」

パウロとバルナバは、それらの地で主の弟子となった人々をフォローアッ



古代都市 ルステラ

プしたのです。信仰に立って歩み、苦しみがあったとしてもめげずに、神の国への道を進むようにと勧めたのです。

③長老たちを選び (23)「また、彼らのために教会ごとに長老たちを選び、断食をして祈って後、彼らはその信じていた主にゆだねた。」

そして、これらの地に教会がしっかりと立っていくために、その地の教会に長老を選びました。こうして選ばれた長老は、その地域教会をまとめる務めとともに、霊的な配慮をする役割も与えられていました。パウロたちは、一同とともに、断食をして祈りをし、選ばれた長老たちが主にあつてその仕事を全うし、教会が守られていくように、主にゆだねていったのです。実際のところ、パウロたちはそこにずっと留まることはできなかつたからです。

3. アンテオケに帰還 (24～28 節)

①ペルガでも宣教 (24～25)「ふたりはピシデヤを通してパンフリヤに着き、ペルガでみことばを語ってから、アタリヤに下り、」

パウロとバルナバは、いよいよ伝道旅行の帰り道に着きます。ピシデヤからパンフリヤに行き、その首都であるペルガに寄りました。行きにはここで、ヨハネ(マルコ)が離脱したことが思い出されます。ふたりは再び、この地で宣教しました。それから、12 キロほどのところにある地中海の港アタリヤに下っていきました。

②送り出され地にもどり (26)「そこから船でアンテオケに帰った。そこは、彼らがいま成し遂げた働きのために、以前神の恵みにゆだねられて送り出された所であつた。」

アタリヤ港から船に乗り、直行でシリアのアンテオケに帰りました。第一次伝道旅行を船で出発する時に送り出された地です。その当時は、まだ伝道旅行について、パウロとバルナバも周囲も未知数であつたことが多かつたと思います。しかし、神の恵みによって委ねられ、送り出されたことは確かでした。

③伝道旅行報告 (27～28)「そこに着くと、教会の人々を集め、神が彼らとともにいて行われたすべてのことを、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。そして、彼らはかなり長い期間を弟子たちとともに過ごした。」

アンテオケに着くと、彼らは早速報告会を開きました。それは、神の恵みの出来事を証しする時でした。特に、異邦人伝道をするなかに、神が道を開いてくださり、多くの異邦人がクリスチャンになったことを報告したのです。その後は、パウロとバルナバは、相当の期間、キリストの弟子達とともに過ごし、彼らと交わり、次の宣教旅行に備えていったと思われまふ。

《結論》

ある伝道者が「伝道とはなんですか」と問われた時に、このように答えたというのです。「伝道とはサタンとの戦いです」と。伝道の内容や方法や問題などが答えられると予想しますが、出された答えは意外でした。しかし、ある面では本質をついています。

パウロとバルナバが敢行した第一次伝道旅行においても、行く所どこにおいて

も主の恵みにより、救われる人々が起こされたのですが、一方ではサタンの働きが強くなりました。今朝の聖書箇所にあるデルベの地においても、パウロはユダヤ人指導者達より石打ちを受けています。危うく、命を落とすところでした。サタンがユダヤ人を巧妙に誘導したといえまふ。パウロが守られたことは主の憐みでありました。一次伝道旅行は、二次、三次の伝道旅行に比べれば、限られた範囲での働きでしたが、迫害はありました。だから、ふたりがフォローアップのために再訪した地のクリスチャンには、「信仰にしっかりとどまる」ことを勧めた上で「神の国に入るには、多くの苦しみを経なければならない」(22 節)と弟子達に伝えているのです。ここにある「苦しみ」には様々な内容がこめられているでしょう。つまり、サタンの妨害は外面的な場合ばかりでなく、内面に不信仰な思い起こさせる重大な脅威があります。また、信徒間に不信感をもたらしたり、衝突を引き起こしたりといったことを、サタンは行ふのです。

パウロたちが去った後も建てられたキリスト教会の歩みは続きます。そこに生じるだろう困難や苦しみを、兄姉が乗り越えるためにも、教会の整えが必要でした。そこで、パウロとバルナバは、それぞれの教会に長老達を立てて、牧会をするように整えていったのです。サタンの脅威や策略に信徒たちが備え、戦っていくために、重要な対策でありました。

それでは、私たちの地における教会の働きにもサタンは攻撃をしてくるのでしょうか。はい。時代を越え、地域や文化を越えて、キリストの教会に対して、サタンは攻撃を仕掛けてきます。教会の建物への危害、嫌がらせ、脅し電話、無言電話、ネット上の悪口といった外側への攻撃。また、内部の不信や不一致をも教会に弱体化、消耗をもたらします。そうしたことを通して、伝道者自身も動揺したり、感情的になったり、右往左往もします。また、それとは別に人間の弱さへの誘惑に乗せられてしまうこともあります。それらの元はサタンの策略なのです。群れの一人一人にも、多様な仕掛けがかけられていきます。罠にはまってしまうこともあるでしょう。クリスチャンは遣わされ所、例えば職場、学校、家庭などでも、サタンは巧みに介入してきます。

サタンは私たちの教会生活や信仰生活を、根底から覆そうとしているのです。霊的洞察力がなければ、それらがサタンからの攻撃とは見破れないこともあります。「悪魔の策略に対して立ち向かうことができるために、神のすべての武具を身につけなさい」(エペソ5:11)とありますが、そのためにも「御霊によって祈る」(5:18)ことが求められるのです。しかし、こうした霊的な戦いは、単にクリスチャンの孤独な戦いではとてもサタンに立ち向かうことも、勝利することもできません。この章においては地域の長老が選ばれたのも、教会が一丸となってこの霊的戦いを進んでいくためです。讚美歌 338 番 2 節には「うき世のさかえ、目を惑わし、いざないの声、耳に満ちて、ころもるもの、内外にあり、主よ、わが盾と、ならせたまえ」とありますが、内外の霊的問題解決を、牧師や長老、執事、主にある兄弟姉妹と分かち合いつつ、祈ってもらいながら、歩いていきたいのです。そこにこそ、主は働いてくださって、主の恵みのうちに、霊的勝利をする道が開かれてくるのです。